

平成 21 年度第 1 回屋久島世界遺産地域科学委員会 議事概要

日 時： 平成 21 年 6 月 28 日（日） 10：00～12：00

場 所： 屋久島町安房総合センター会議室

議事次第

1. 開会
2. 委員紹介
3. 屋久島世界遺産地域科学委員会の設置について
4. 委員長及び副委員長の選出
5. 議事
 - (1) 屋久島世界遺産地域の概要とこれまでの経緯について
 - ・ 屋久島世界遺産地域の概要
 - ・ 登録時における世界遺産としての価値と IUCN の評価
 - ・ 地域連絡会議において整理された課題
 - ・ 関係機関等の取り組み状況（関係機関の平成 21 年度事業の説明を含む）
 - (2) 順応的保全管理体制の構築と今後のスケジュール
 - (3) 世界遺産としての屋久島の価値と対応が求められる課題
6. 閉会

配付資料

- 資料 1－1 議事次第
資料 1－2 委員会名簿
資料 2－1 設置要綱
資料 2－2 屋久島世界遺産の保全管理に関する機関・団体
資料 2－3 近年の世界遺産委員会における議論と
世界遺産地域科学委員会設置の必要性について
資料 3－1 屋久島世界遺産地域について
資料 3－2 世界遺産登録時及び登録後の IUCN の評価について
資料 3－3 屋久島世界遺産地域の課題と対策の方向性
資料 3－4 対策の方向性に基づく事業実績と平成 21 年度事業（案）
資料 4 順応的保全管理体制の構築に向けた検討事項と今後のスケジュール
資料 5 世界遺産としての屋久島の価値

- 参考資料 1 世界遺産条約の概要について
参考資料 2 屋久島世界遺産推薦書
参考資料 3 屋久島世界遺産地域管理計画
参考資料 4－1 知床世界自然遺産地域管理計画（案）の概要
参考資料 4－2 知床世界自然遺産地域管理計画（案）
※パブリックコメント用

委員会名簿

(委員)		
氏名	職名	出席
荒田 洋一	樹木医	○
井村 隆介	鹿児島大学大学院理工学研究科准教授	
大山 勇作	屋久島野生植物研究所主宰	○
小野寺 浩	鹿児島大学学長補佐	○
吉良 今朝芳	鹿児島国際大学国際文化研究科教授（非常勤）	○
柴崎 茂光	岩手大学農学部准教授	○
鈴木 英治	鹿児島大学大学院理工学研究科教授	
立澤 史郎	北海道大学大学院文学研究科助教	○
下川 悦郎	鹿児島大学農学部教授	○
日下田 紀三	写真家	○
福山 研二	森林総合研究所研究コーディネーター	○
松田 裕之	横浜国立大学環境情報研究院教授	○
矢原 徹一	九州大学大学院理学研究院教授	○
吉田 茂二郎	九州大学大学院農学研究院教授	○

議事要旨

■屋久島世界遺産地域科学委員会の設置について

- 事務局より、世界遺産委員会での議論、科学委員会設置の必要性、及び設置要綱案について説明。
- 提案された設置要綱にて科学委員会の設置が確認された。
- 屋久島においては、世界遺産管理とユネスコ MAB 計画の BR (Biosphere Reserve) の管理との連携が望まれるとの意見が出された。

■委員長及び副委員長の選出

- 事務局の提案により矢原委員長、吉良副委員長が選出された。

■議事

議題（１）屋久島世界遺産地域の概要とこれまでの経緯について

- 事務局より「世界遺産地域の概要」と「登録時における世界遺産としての価値と IUCN の評価」について、資料 3-1 及び 3-2 に基づき概要説明。関係行政機関のこれまでの取組について資料 3-3 及び 3-4 に基づき説明。
- 委員からの主な意見は以下の通り。

- ・世界遺産の管理の考え方の整理を進めていく上では、直接的な住民参加のほか、間接的な方法としては、地域住民による各種活動のネットワークも取り込んで、地域の意見や提案を幅広く聴く仕掛け作りが必要。
- ・「全島の野生生物管理計画の作成」は早急な対応が必要。資料の 3-4 に狩猟や有害鳥獣捕獲を位置付けるべき。世界遺産の地域外との調整が実際に事例として出てきていることは評価できる。
- ・世界遺産のコア地域が非常に狭く、また垂直構造が足りない部分があるということを考えれば、やはりその周りにある植生と現在指定された部分の関係が大切。今まで森林施業が行われてきた地域をどう考えるかといった視点が欠落。
- ・腐朽菌、共生菌、どのような菌と共生しているのか長期的な研究データの蓄積が必要。

議事（２）順応的保全管理体制の構築と今後のスケジュール

- 事務局より、資料 4 について説明。

議題（３）世界遺産としての屋久島の価値と対応が求められる問題

- 事務局より、資料 5 に基づいて、屋久島の価値について説明。
- 顕著な普遍的価値（OUV）の再確認に関する主な意見は以下の通り。

- ・ IUCN の 4 つクライテリアのうち、「自然景観」については、屋久島の場合、スギの原生林が、森林の景観として、例えば、カリフォルニアのセコイアデンドロンの林などに匹敵する価値が世界的にあるといった評価を受けている。
- ・「生態系」については、暖温帯も含めて、温帯域に 2000m 級の島というのは屋久島だけである。
- ・「生物多様性」は、クライテリアに該当せずと評価を受けたが、日本の絶滅危惧種のホットスポットは、小笠原と屋久島と沖縄であり、この 3ヶ所を守れば、半分ぐらいは保全できる。
- ・平成 24 年の再評価にあたっては、生物多様性についてもきちんと資料を出して、国際的な評価を受けることが必要。
- ・世界遺産に指定された範囲だけではなく、島全体を一つのテーマとして世界遺産を保全していくという考え方が必要。地球温暖化とも関連して、原始的な照葉樹林の存在を見直し・評価も必要。
- ・MAB 計画（ユネスコ（人間と生物圏）計画）の考え方の中では、コア・エリアを守っていくために、人々が自然を利用して営みを行う区域としての緩衝地帯というものが位置づけられており、遺産地域の管理の視点としては、緩衝地帯を含めた管理施策やモニタリングの実行など、トータルな管理方策を作っていくということが重要。
- ・屋久島全体の価値についての議論が望まれる。

- ・幅広く価値を認めた上で、特に普遍的な価値を挙げるという考え方が重要。科学者だけではなく、様々なステイクホルダから価値を拾い集めるような取り組みが今後の課題。
- ・屋久島の方々が、屋久島の文化的な価値を含めて、自分たちで島の価値を認識して島全体を今後どうやってより良い形で次世代に引き継いでいくかという屋久島での主体的な議論と、世界遺産という国際的な枠組みの中で、どうやって世界的な要請に応えていくか、二つに分けて議論すべき。
- ・目的意識を鮮明に設定して動くような大きな研究プロジェクトやレビューが必要。科学委員会での議論を地元と共有するための意見交換の場が必要。
- ・「自然景観」に関して、千尋の滝を含む屋久島の自然美というものが、世界遺産の価値に相当するものだという認識で対応していく必要がある。
- ・「生態系」に関して、西部だけではなく、南部や東部の植生の連続性をカバーした管理が必要。
- ・IUCNの評価というのが広報的な情報としては採用されるべき。
- ・縄文杉がただ一本だけあるというのではなく、他にも千年を超えるようなスギが沢山ある原生林の景観全体が評価されている。より正確に伝えていく必要がある。
- ・水は屋久島の自然を特徴付ける一つの大きな要因であり、水系分布を価値として入れることが絶対に必要。
- ・今後も継続して議論が必要。屋久島に入っているいろいろな研究者のいろいろな研究の成果を総合して、レビューをして、今後のモニタリング計画を作っていくということが、科学委員会の仕事。
- ・優先順位を付けていく作業が必要である。
- ・IUCNの評価基準をかなり意識した場合と、屋久島の場合もう少し社会条件、歴史・文化といったものを含めてトータルな評価基準を意識した場合とで、随分違ってくる
- ・IUCNのクライテリア+ α の価値を、我々として見出して、それも加えた評価をしていけば何の問題もないが、IUCNが評価している部分を重視せず、他のところを重視して提案しても通用しない。
- ・データを集めるだけでなく、更なる住民参加・ボトムアップを進めるために、地域を取り込む仕掛け作りが必要。
- ・知床においては、地域コミュニティや関係者の参画を通したボトムアップアプローチによる管理方法が、IUCNによりが賞賛された。
- ・IUCNのクライテリアで認められた国際的な屋久島の価値について、きちんと応えていく専門家集団としての委員会が、屋久島の科学技術的な見方にどういう考えを持って臨むのかということが問われている。
- ・管理計画案の前段に、基本的に科学委員会として、屋久島全域を考えた時に、特に世界遺産の評価を考えた時に、どういったモニタリングが重要かという基本方針がまず必要。
- ・より先端的、モデル的なモニタリングというものをやってみることが必要。
- ・屋久島全域で行われているモニタリング、調査級地点やその内容などを効率的、効果的に共有し、科学的に分析を行うためには、GISを使った管理が重要。

○メーリングリストで議論を進める旨確認された。

■閉会

○事務局より今後の進め方について整理され、第2回会議は12月開催との予定が示された。